

みんなちがって みんないい

(2017.01.05)



園の近くで卒園児のA子ちゃん親子に出会った。幼稚園の時と比べ、ずいぶん元気がなかった。受験校に入り、夏休みも冬休みもなく、特訓しているとのこと。お母さんは、「東大入学コースで、A子はものすごく頑張っているのです。大学に入れば自由に遊べるから、中高の6年間は我慢して、と言っているんです。」と言った。その後、A子ちゃんは有名大学を卒業して、就職もせず、直ぐに結婚したということを風の便りに聞いた。私は何なんだろうと思った。人生で一番楽しくて輝いている時、恋をしたり、冒険をしたり、いろんな経験をする時を我慢して、捨てていいのかなと思った。

最近、幼児期から、英才(?)教育に向かう親がいる。英才教育といっても、何のことはない、駅名や花の名を覚えたり、俳句や漢字を読ませ、(書かせはしない)ただ意味もなく暗記させるだけである。こんなことをしても人生で何の役にも立たない。考えたり、工夫したり、想像したり、創造力を刺激したりすることはない。

日本の受験競争のテストの中味が単純に選別するための手段として、いかに多く知っているか、だけであるから。駅名を多く知っていても、意味も分からず難しい漢字を読めるからといっても何の意味もない。もし、能力を計るなら、子ども達を一日中自由に遊ばせ、その「遊び方」や、友達関係の作り方、食事の食べ方を見る、校内に入ってきた時に、どんな態度をとるか、きちんと「あいさつ」ができるかを見た方がその子の能力を計る上で有効である。私の体験からすると、大体のところ、受験のための勉強など、人生の役には立たない。

結局、受験戦争の元は、親の教育観のせいだと思う。教育観とは、人生観、人間の幸福観である。人の本当の幸せは何か、である。みんな同じに、一流校を出て、一流の会社に入って、と画一的になっていけば、人の評価も画一的なテストで決めてしまう。みんな違って、人それぞれが、自由に自己発揮・自己実現し、自分の思うような人生を生きていくのが一番幸せなことだと思うのだが……。競争社会では、認められないのだろうか？



豊かな人生

(2017.02.01)



子ども達には、「良い人生」を歩んで欲しい。良い人生、豊かな人生は、決してお金持ちになることや、社会的地位の高い人になることとは違う。勿論、良い人生を送っている人もいるだろうが、こういう人達が必ずしも良い人生を送っているとは言えない。「豊かな人生」は、苦しいこと、辛いことがあっても、それを克服して、楽しく自由に自分の思い通りに生活できること、「嫌なことは嫌だ」と言えることだと思う。

マルツ（心理学者）が「人の人生脚本は幼少期に書かれる」と言っている。みんなから認められ、愛されて、「人ということ、生きることが楽しい」という生活を幼少期に送っている子は、楽しい人生を送れるようになるという。反対に、いつも叱咤され、追い詰められ、失敗すると「ダメな奴だ!」「お前はバカだ!」と言われ続ける子は、暗い人生を送る脚本を書かれてしまうと言う。周囲を見廻すと、ふたばっ子はみんな実に楽しそう。良い人生を送れるだろう。

幼児教育の目標（ねらい）は、意欲、心情、態度を養うことだと言われる。「意欲」は、やる気、苦しいことにもチャレンジすることなどである。「態度」は社会人としての生活習慣やマナー、規範意識などである。「心情」であるが、文字通り心と情（情緒）である。やさしい気持ちや勇気、情緒を理解すること等であろう。

豊かな人生を送るためには、心情につながる感性が大切であると思う。いい目と、いい耳と、いい舌と、いい膚と、いい鼻と、いい脳（六感）が必要である。同じ自然の中にも、緑の色の違い、多様な美しさ、空と雲の色彩とその濃淡、頬をなでる風のそよぎ、匂い、静寂の中にある沢山の種類の鳥の声、風の音・・・感性の違いによって生きる喜びが違って来る。食べることも同様。一流のソムリエは鼻が良く、舌の感覚がいいというが、私たちも、同じものを味わっても、味わいの深みが違って来る。いい感性を持っていると、人生が豊かになり、深まる。いい感性は、美しさや優しさや、美味しさや悲しさを感じる力であり、物事の本質を見抜き、感じる力である。深い思考と感性で、社会がおかしな流れになった時、ポピュリズムに流されず「何かおかしいぞ」と感じるようになること。子ども達に、そういう感性を持った人間になって欲しい。

[追伸]

いくら、個人が幸せで豊かな人生を築いても、悪政や暴力（戦争）によって、一瞬に奪われてしまうことがある。・・・平和な世界を子ども達に伝えたい。「嫌なことは嫌だ!」と言える人になって欲しい。



育つ力と育てる力

(2017.03.01)



発表会は素晴らしかった。子ども達の真剣な眼差し、澄んだ歌声、年少児の楽しげな姿、年中児は少し緊張してしっかりとした合奏、そして最後に年長のピンと背筋が通って圧倒される程の迫力ある演奏と合唱に、保護者の皆様は感動の涙。たった一年で、こんなに成長する子ども達の姿に、心が揺さぶられる程の感動を覚える。子どもは、あっという間に大きくなる。体もしっかりして、動きも機敏になる。外見だけでなく、語彙も増え、言葉も滑らかになり、コミュニケーションも上手になる。そして、他者の思いを理解し、他者の立場を思いやる優しい心を持つようになる。子どもは、子どもにふさわしい時間を生きることにより、体も心も脳も成長する。一年のしめくくりの行事でそう感じた。

子どもは育つ力が元々あるが、それは育てる力がなければならない。虐待された子どもは育たない。親や周囲の愛が無ければ育たない。ネグレクトされたり、体罰を受けていれば心が曲がってしまうだけでなく、体も育たない。数年前に3歳になった女の子が、段ボールの中に押し込められ、臭いからと、物置に放置され、衰弱した事件があった。体重は5キロしかなかった。育つ力がなくなってしまったのだ。私は体が震えるほどの怒りと悲しみを抑えることができなかった。子どもは大人の愛がなければ育たないのだ。

渡辺京三の「逝きし世の面影」では、外国人の誰かが次のように記している。「人々の質朴な習俗とともに、…いたるところに満ちている子ども達の嬉しい笑い声を聞き…日本は美しい豊かな国だ」と。私達は、子どもを宝物のように大切にしてきた。だから発展してきたのだ。発表会が終わった後に、各クラスに行くと、子ども達は十分に満足した表情で、自信に溢れ、笑顔が輝いていた。この子達は、愛されている、幸せなのだと感じた。

【追記】大人の愛は歪むことがある。悪にも善にもなる。子ども中心の愛こそ、本当の愛であり、大人の思いが強すぎ、子どもを大人の意のままにしようとすると、歪んだ愛になる。



母語と英語

(2017.05.01)



小学校でも3年生から英語の授業が始まり、5・6年生では、国語・算数と同様の「教科」になるという。幼稚園でも英語を教えることを売り物にしているところが出てきて、親が殺到（子どもではない）している。余裕のある家庭では、幼児期から英語教室に通わせ、中高生になると夏休みに語学留学させたりしている。大学の英語化は、既に進んでいて、東大・京大・早慶は英語だけのコースがあるという。英語教育熱は高まっている。しかし、幼稚園では、外人講師を雇っているが、一向に効果はない、という話を耳にする。週一回程度、あるいは月二～三回外国人講師による英語指導では、単発的で身につかないのである。ただ、外国人講師というパフォーマンスだけになっている。

そういえば、中国や韓国を支那とか第三国と言って挑発しながら、尊大な態度で訳の分からぬ横文字を連発していた知事がいた。英語はできた方がいいが、できればそれでいいというものでもない。言語はその国の共通のコミュニケーションの手段であり、知である。人は物を考え、想像し、創り出す時に母語で行う。ノーベル賞受賞者が、「私は外国語は一切できません」と、胸を張って日本語で通していたことがあった。

創造性やひらめきは深い思考から出てくる。その思考は母語で行う。そして、それを論理的に表現するのは、やはり母語である。英語を重視するあまりに、母語を殺しては、知を喪失することになる。やはり、母語を大切にしたいうえで、英語ができることが良い。幼児期は、まず母語をしっかり身に付けたうえで、生活（遊び）の中で、自然に英語にふれ、身に付けていくことが大切である。そこで、是非絵本を沢山読んで、いっぱいお話をすることをお勧めする。そして次に、・・・英語に触れる機会を無理なく、自然にできるようにしたい。



変身！！(ヘンシーン)

(2017.06.01)



子ども達は変身が大好きです。そして、本当に変身するのです。腕をグルグル回したり、交差させて「ヘンシーン」と叫びウルトラマンになったり、仮面ライダーになって、私を怪獣や悪人に見立て短い手足で戦いを挑んできます。それが段々大勢になり、私は、広い園庭を逃げ回ります。そして、去年はアキレス腱を切りました。

家庭では何もできず、言う事を聞かず、何でもイヤ、バカを連発し、思いどおりにいかないとすぐにグズリ、泣いて暴れていた子が、幼稚園に入ると1ヶ月もしない内に、突然何でも自分でサッとやるようになります。お弁当・給食の準備も片づけもサッとやります。お帰りの仕度を終えると、姿勢よく先生の前に座り、身じろぎもせず絵本に集中します。お母さん方は、家では考えられないと言います。全ての子がそうではないのですが、ほとんどの子が変身するのです。あのイヤイヤ、バカの連発は、自分のことは自分で決めて、自分でやりたいのに、自分とは違うお母さんの指示・命令がうっとうしかったのではないのでしょうか。もともと自我が発達し自主性のある子が、幼稚園に入ると、自主的、自発的に、何でもやるようになるのです。反対に、お母さんの命令に従順に従っていた子は、変身するのに時間がかかっているようです。

先日、昼食の時に、大声で泣いている子がいたので、どうしたのか聞いてみました。泣くばかりで何もわかりません、担任に聞いてみると、自分の思い通りにならないことがあり、「お母さーん」と泣いているとのことでした。担任が一生懸命説得していましたが、自分で折り合いをつけなければ仕方がないのだから、そのまま給食にした方が良くいと伝えました。それでも大きな声で泣きつづけているので、「もうお昼だし、そんなに泣いていては疲れたろう？泣くのを止めたら？」と言うと「疲れた、でも泣く」と言って泣いていました。給食の歌が始まると、泣きながら歌いました。給食も泣きながら食べ、口の中の食べ物が無くなると、大泣きしていました。私が「ごちそうさまでした」と手を合わせると、何と、泣きながら私に「はい、いい子でしたね」と言って、又食べながら泣き続けていました。きっと、何でもお母さんにやってもらい、お母さんの言うとおりにすると、いつも「はい、いい子でした」と育てられたのでしょう。

幼稚園はお母さんにとって都合のいい子より、たくましい良い子を育てます。幼稚園では、何でも自分の事は自分で考え、自分で決めて、自分でやり（実践）、その結果、うまくいったらもっとうまくやろうと考え、自分の思い通りにいかなくとも、自分のせいだから、なんとかうまくやろう（成功させよう）と挑戦します。これが「遊び」の本質です。最近、小学校以降の教育で、アクティブ・ラーニングとか、非認知的能力が社会的成功と密接に関連していると話題になっていますが、幼稚園はずっとその能力を高める事に腐心してきました。

非認知能力を育てる

(2017.09.01)



保育室の前を通り過ぎようとした時に、子ども達が、テレビの画面に向かって、楽しそうに英語で歌ったり、復唱したりしていた。英語教育システムを導入して1ヶ月も経たないのに、あまりに流暢に発音しているのでビックリした。初めは何を言っているのか分からなかった。耳からは入ってきた通りに発音するので、全くネイティブな英語なのだ。テレビの画面のブルース先生と同じ発音で、英語を話している。私の英語とは全く違う。あんな発音は私には絶対できないし、聞き取ることもできない。私の英語は、まず文字（単語）を並べて、文章を作成してから発声する。聞く時も同様。聞き取れる単語を捕まえてから文章を構成する。会話にならない。文字を介した日本語の英語である。そういえば、担任の先生は、進行と音頭をとるだけで、英語を話さないで下さい、と言われていた。日本語の英語になるからであろう。

一時「3歳児神話」の真偽について論争があった。3歳児神話には2点あり、「3歳になるまで、母親が子育てすべきだ。」と、「脳の8割ができてしまう3歳までの環境が大切だ。」というものだ。「3歳までは母親が」という神話は今では退けられている。人類の家族史、からみても、子どもと親密な関係を持つ人が、近くにいて保育をしてくれていれば、それが、父親であっても、祖父母、あるいは他人でも良い。脳の発達に関わる3歳児神話も、早期英才教育の根拠になっているが、その教育効果は疑わしい。発達認知神経科学の専門家の間でも「早期教育の効果を科学的に証明したものはない。スポーツや音楽でも、全ての子どもがプロになれる程伸びることはない」という。

しかし、この時期が大切でないという訳ではない。この時期は特定の保育者との親密な関係と適切な環境が非常に大切である。悪い環境で育つと、発達が遅れるという研究がある。虐待を受けた子は、脳にもダメージを受ける。発達の過程では「臨界期」という時期がある。生まれてすぐの動物の片方の目を一定期間塞ぐと、その目は弱視になってしまう。臨界期に光の刺激を受けないと、脳内の視神経が育たないのだ。シカゴ大学の小児科医が、生まれつき耳の聞こえない2人の乳児に、人工内耳をつける手術をして、聴覚を取り戻した。しかし、10歳の時、2人の成長に大きな違いがあった。一人は話す能力と学力を身に付けたが、もう一方は話す力がなく、手話での学習クラスにいた。話す力がつかなかった子は、ほとんど会話のない家庭環境の中で育てられていた。耳から入る言葉は、脳の発達に欠かせない栄養。聞く能力は、話す能力、読む能力に繋がり、読むことで広く学べるようになる。英語の環境は整ったが、その前に親子の会話がまず大切だ。絵本を読んであげて、会話を楽しむ。英才教育は必要ないが、子どもの脳が発達するためには、良い環境が必要なのだ。



黄昏に輝く

(2017.10.02)



保育室の前を通り過ぎようとした時に、子ども達が、テレビの画面に向かって、楽しそうに英語で歌ったり、復唱したりしていた。英語教育システムを導入して1ヶ月も経たないのに、あまりに流暢に発音しているのでビックリした。初めは何を言っているのか分からなかった。耳からは入ってきた通りに発音するので、全くネイティブな英語なのだ。テレビの画面のブルース先生と同じ発音で、英語を話している。私の英語とは全く違う。あんな発音は私には絶対できないし、聞き取ることもできない。私の英語は、まず文字（単語）を並べて、文章を作成してから発声する。聞く時も同様。聞き取れる単語を捕まえてから文章を構成する。会話にならない。文字を介した日本語の英語である。そういえば、担任の先生は、進行と音頭をとるだけで、英語を話さないで下さい、と言われていた。日本語の英語になるからであろう。

一時「3歳児神話」の真偽について論争があった。3歳児神話には2点あり、「3歳になるまで、母親が子育てすべきだ。」と、「脳の8割ができてしまう3歳までの環境が大切だ。」というものだ。「3歳までは母親が」という神話は今では退けられている。人類の家族史、からみても、子どもと親密な関係を持つ人が、近くにいて保育をしてくれていれば、それが、父親であっても、祖父母、あるいは他人でも良い。脳の発達に関わる3歳児神話も、早期英才教育の根拠になっているが、その教育効果は疑わしい。発達認知神経科学の専門家の間でも「早期教育の効果を科学的に証明したものはない。スポーツや音楽でも、全ての子どもがプロになれる程伸びることはない」という。

しかし、この時期が大切でないという訳ではない。この時期は特定の保育者との親密な関係と適切な環境が非常に大切である。悪い環境で育つと、発達が遅れるという研究がある。虐待を受けた子は、脳にもダメージを受ける。発達の過程では「臨界期」という時期がある。生まれてすぐの動物の片方の目を一定期間塞ぐと、その目は弱視になってしまう。臨界期に光の刺激を受けないと、脳内の視神経が育たないのだ。シカゴ大学の小児科医が、生まれつき耳の聞こえない2人の乳児に、人工内耳をつける手術をして、聴覚を取り戻した。しかし、10歳の時、2人の成長に大きな違いがあった。一人は話す能力と学力を身に付けたが、もう一方は話す力がなく、手話での学習クラスにいた。話す力がつかなかった子は、ほとんど会話のない家庭環境の中で育てられていた。耳から入る言葉は、脳の発達に欠かせない栄養。聞く能力は、話す能力、読む能力に繋がり、読むことで広く学べるようになる。英語の環境は整ったが、その前に親子の会話がまず大切だ。絵本を読んであげて、会話を楽しむ。英才教育は必要ないが、子どもの脳が発達するためには、良い環境が必要なのだ。



「感じること」から始まる

(2017.11.01)

NOVEMBER 

保育室の前を通り過ぎようとした時に、子ども達が、テレビの画面に向かって、楽しそうに英語で歌ったり、復唱したりしていた。英語教育システムを導入して1ヶ月も経たないのに、あまりに流暢に発音しているのでビックリした。初めは何を言っているのか分からなかった。耳からは入ってきた通りに発音するので、全くネイティブな英語なのだ。テレビの画面のブルース先生と同じ発音で、英語を話している。私の英語とは全く違う。あんな発音は私には絶対できないし、聞き取ることもできない。私の英語は、まず文字（単語）を並べて、文章を作成してから発声する。聞く時も同様。聞き取れる単語を捕まえてから文章を構成する。会話にならない。文字を介した日本語の英語である。そういえば、担任の先生は、進行と音頭をとるだけで、英語を話さないで下さい、と言われていた。日本語の英語になるからであろう。

一時「3歳児神話」の真偽について論争があった。3歳児神話には2点あり、「3歳になるまで、母親が子育てすべきだ。」と、「脳の8割ができてしまう3歳までの環境が大切だ。」というものだ。「3歳までは母親が」という神話は今では退けられている。人類の家族史、からみても、子どもと親密な関係を持つ人が、近くにいて保育をしてくれていれば、それが、父親であっても、祖父母、あるいは他人でも良い。脳の発達に関わる3歳児神話も、早期英才教育の根拠になっているが、その教育効果は疑わしい。発達認知神経科学の専門家の間でも「早期教育の効果を科学的に証明したものはない。スポーツや音楽でも、全ての子どもがプロになれる程伸びることはない」という。

しかし、この時期が大切でないという訳ではない。この時期は特定の保育者との親密な関係と適切な環境が非常に大切である。悪い環境で育つと、発達が遅れるという研究がある。虐待を受けた子は、脳にもダメージを受ける。発達の過程では「臨界期」という時期がある。生まれてすぐの動物の片方の目を一定期間塞ぐと、その目は弱視になってしまう。臨界期に光の刺激を受けないと、脳内の視神経が育たないのだ。シカゴ大学の小児科医が、生まれつき耳の聞こえない2人の乳児に、人工内耳をつける手術をして、聴覚を取り戻した。しかし、10歳の時、2人の成長に大きな違いがあった。一人は話す能力と学力を身に付けたが、もう一方は話す力がなく、手話での学習クラスにいた。話す力がつかなかった子は、ほとんど会話のない家庭環境の中で育てられていた。耳から入る言葉は、脳の発達に欠かせない栄養。聞く能力は、話す能力、読む能力に繋がり、読むことで広く学べるようになる。英語の環境は整ったが、その前に親子の会話がまず大切だ。絵本を読んであげて、会話を楽しむ。英才教育は必要ないが、子どもの脳が発達するためには、良い環境が必要なのだ。



無題

(2017.12.01)



叙勲なんて大したことではないのだと、思っておりました。今もそう思っています。しかし、周囲が大変な騒ぎになってご迷惑をかけることになってしまいました。佐藤愛子さんの「90歳、何がめでたい」という本が売れているようです。私も「叙勲、何がめでたい」という心境です。皆様に祝って頂いた事には、心から感謝しておりますが、私は何も大したことをしていないので、お祝いして頂くことがとても恥ずかしくなり、身が縮む思いです。事実、子ども達は私が仕事をしているなど、これっぽっちも思っていない。ただ、遊んでいるだけと思っています。子ども達は、私と遊んでいる時、「お仕事へ行かなくていいの?」「会社にはいつ、行くの?」と尋ねてきます。私が園から事務所に行く時、「どこへ行くの?」と尋ねられ「事務所へ行くの」と答えると、必ず「お仕事頑張ってきてね!」と言います。園にいる時、私はただ楽しく遊んでいるだけのジイさんなのです。子ども達は、それを知っているのです。仕事をしていないことを……。褒められるようなことは、何もしていないのです。だから「おめでとうございます。」と言われると「ありがとうございます。」と答えますが、遊んでいるだけなので本当は恥ずかしくて、下を向いてしまうのです。穴があったら入りたいのです。

新聞報道の大分前に、内示があったのですが、誰にも言いませんでした。早く通り過ぎるのを待っていましたが、新聞記者がインタビューさせてくれ、と私を追いかけてまわしました。私は居留守を使って、電話にでないようにしていましたが、とうとう捉まってしまいました。私は「新聞に載るのは嫌だ」と断り「他にもいっぱいいるのに、どうして私ばかり追いかけるのか?」と聞きました。すると「元公務員、元公職者ばかりなのは、面白い記事が書けないのです。やはり、どうしてもダメですか?」と困っている様子でした。優しい私としては、つい「いいですよ。」と言ってしまったのが運のつき……。休み明けに園に行くと、子ども達が駆け寄ってきて「園長先生、新聞に載ってたよ、どうしたの?」と、何か悪いことでもして、新聞記事になったような言い方です。私は「何もしていないの、どうしてだろう」と答えるしかないのです。何もしていないのですから。

最近、やっと嵐が去り、ホッとしています。お騒がせ、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。これからも、ずーっと子ども達と楽しく遊んでいきたいと思っておりますので、そっと見守って下さい。宜しくお願いします。

